



南葵音楽文庫ミニレクチャー

オルガンの巨匠 シャルル=マリ・ヴィドール

～頼貞が会った音楽家たち (3)

近藤秀樹

2020年1月25日(土) 11:00

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel. 073-436-9500



https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fa/Charles-Marie_Widor_%282%29.jpg

シャルル=マリ・ヴィドール (Widor, Charles-Marie 1844-1937)

フランスのオルガニスト、作曲家、教師。オルガン建造家で演奏家であった父からオルガンの手ほどきを受ける。幼少時からすぐれた才能を見せ、11歳でリヨンのリセのオルガニストになる。

その後、高名なオルガン製作者カヴァイエ=コルの推薦でブリュッセルに行き、そこで作曲をフェティスに、オルガンをJ.-N. レメンスに学んだ。後者からはバッハの作品についての伝統的なドイツの演奏法を伝授される。1870年から、64年の長きにわたって、パリのサン=シュルピス教会のオルガニストをつとめる。

1890年のセザール・フランクの死去に伴い、ヴィドールはパリ音楽院のオルガン科の教授に就任。6年後にテオドール・デュボアが同音楽院の院長になると、ヴィドールは彼の後を継いで作曲家の教授となる。

1910年に美術アカデミーの会員にえらばれ、四年後に終身書記長になる。

10曲のオルガン交響曲をはじめ、歌劇、バレエ、管弦楽、室内楽、ピアノ曲等、多数の作品を遺す。

『近代管弦楽法』などの著作もある。

I. 徳川頼貞、ヴィドールに会う: (1) オルガンでバッハを聴く

第三次外遊とパリ滞在

私は昭和三年の九月に伯林 [ベルリン] で開かれる万国議員商事会議 (International Parliamentary Conference of Commerce) とその翌年、1930年の6月に英京倫敦に催され万国議員会議 (Parliamental Union) とに貴族院代表の一人として出席することの委嘱を受けた。私は妻を同伴三度目の欧州旅行に旅立つことになって、1929年5月14日、神戸出航のM.M.会社の汽船ダルトニアン号に乗ってマルセイユに向った。

(徳川頼貞『蒼庭樂話』)

神戸→マルセイユ→パリ(名ピアニストのコレトーに会う)→ロンドン

自動車で北欧の旅: カレーからベルギーに入り、ブリュッセル、アントワープを経てオランダのライデンへ。

→北ドイツのブレーメン、ハンブルクを通り、海を越えてデンマークに渡り、首都コペンハーゲンへ。

パリ滞在中の一日、私達は前駐日仏蘭西大使ド・バイ氏と一緒にサン・シュルピス寺院にシャルル・ヴィドールを訪ねた。ヴィドール翁は現代の大オルガニストでまた作曲家である。セザール・フランクの後継者としてパリ音楽院のオルガン科教授に任ぜられ、デュボア亡き後は同音楽院の作曲学の教授をも兼ねて、その名声は翁の天才的創意と活力とによって世界に喧伝せられている。ヴィドール翁は我々を快く迎え、暫く話した後、寺院のオルガンでバッハのプレリュードとトカータ [ママ] とフーガを奏いて聴かせて呉れた。オルガンの音は誰も居ない我々訪問者だけの伽藍の中に美しく響きわたった。演奏が終ると、翁は私にオルガンのストップの性質や使用方を懇に説明した。(徳川頼貞『蒼庭樂話』)



サン・シュルピス教会の外観。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Sunsulpice01.jpg>

ヴィドールの演奏したオルガン

もともとは 1781 年に Francois-Henri Clicquot が作ったもの。

1861 年に、オルガンの名製作者、カヴァイエ-コル (Aristide Cavallé-Coll 1811-99) がこれを改修し、世界最大のオルガンの 1 つとなった。

ヴィドール自身のオルガン作品の多くは、サン・シュルピス教会のオルガンで演奏することを前提に書かれている。



https://img.over-blog-kiwi.com/0/67/15/26/20150712/ob_ddc5a6_widor-st-sulpice-ca-1900.jpg

ヴィドールと J. S. バッハ

ヴィドールはバッハ演奏の権威。オルガンの師レメンスからバッハ演奏の伝統を引き継ぐ。

アルベルト・シュヴァイツァーとともにバッハのオルガン作品集の楽譜を編集。

→ 頼貞がサン・シュルピス教会で聴いた「プレリュードとトカータとフーガ」は、ヴィドールが編集した作品集に含まれる曲か？

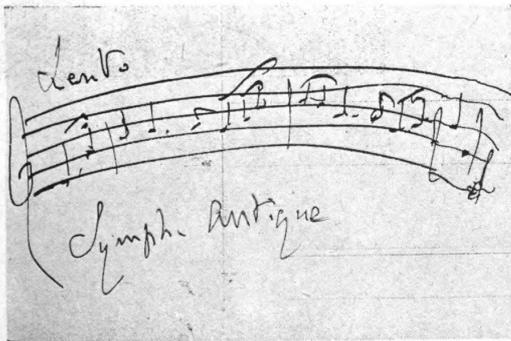
ex. 《プレリュードとフーガ》二長調 BWV532

ヴィドールとシュヴァイツァー

アルベルト・シュヴァイツァー（Albert Schweitzer 1875 - 1965）は医者でありオルガニスト。バッハの演奏と研究の権威として知られるが、オルガニストとしてはヴィドールの弟子にあたる。晩年に至るまでオルガニストとして演奏活動を行い、録音も残している。シュヴァイツァーの著作『ヨハン・セバスティアン・バッハ』（*Jean-Sébastien Bach, le musicien-poète*, 1905）には、ヴィドールが序文を寄せている。



https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/15/Albert_Schweitzer%2C_Etching_by_Arthur_William_Heintzelman.jpg



ヴィドールの記念品

『蒼庭樂話』に掲載されているヴィドール自筆の楽譜は、ヴィドールの《古風な交響曲》(*Symphonie antique*)から採られたもの。
1911年作曲。独唱、合唱、オルガン、管弦楽のために書かれた大作。

II. 頼貞、ヴィドールに会う: (2) オルガンでモーツァルトを聴く

翁は次に我々をこの寺院内に在る小さなチャペルに案内した。其処には二個の小さなマニエールのあるパイプ・オルガンがあった。翁はそれを指し乍ら、これはもとベルサイユ宮のチャペルにあったものだが或る時代に此処に移されたもので、有名なモーツァルトが愛奏した記念すべきオルガンであると語った。そして私をオルガンの傍に連れて行って「触って御覧なさい。この鍵盤は大変堅いのです。バッハでもモーツァルトでも、あの時代の人は皆こんな堅い鍵盤で苦しめられたのです」と話した。押してみると実際非常に堅くて力が要る。近代のオルガン、特に電気のオルガンは鍵盤のアクションがピアノときえ比較にならない程軟いので、この古いオルガンの堅さが特に甚だしいように私には感じられた。ヴィドール翁はオルガンの前に坐って、モーツァルトはこの曲をこういう風に奏きましたと云いつつヴァリエーション・ソナタ・イ長調の第一楽章のアンダンテ・グラチオーソを驚く可き美しさを以て奏いた。(徳川頼貞『蒼庭樂話』)

頼貞が聴いた曲は何か？

「ヴァリエーション・ソナタ・イ長調の第一楽章」とは？

《ソナタ》イ長調 K.331(トルコ行進曲付き)の第一楽章「アンダンテ・グラチオーソ」か？

ヴィドールが頼貞に贈ったサイン入りの写真。p.2 の写真で弾いているのは別の、小型のパイプオルガン。



III. ヴィドールと南葵音楽文庫

南葵音楽文庫所蔵の、ヴィドールの楽譜

- 《組曲》、チェロと管弦楽ないしピアノのための [ホルマン・コレクション]
- 《セレナード》、ピアノ、フルート、ヴァイオリン、チェロ、ハルモニウムのための

南葵音楽文庫所蔵の、ヴィドールの著作

- *Initiation musicale*, Collection des initiations, Hachette, 1923.
- *Technique de l'orchestre moderne, faisant suite au Traité d'instrumentation et d'orchestration de H. Berlioz*, H. Lemoine, 1925.
- *The technique of the modern orchestra, a manual of practical instrumentation*, translated by Edward Suddard, J. Williams, 1906.
- 『近代管弦楽法』, 塚谷 晃弘訳, 全音楽譜出版社, 1962 年。

オルガニスト、木岡英三郎 (1895-1982)

南葵音楽事業部の評議委員。主任オルガニスト。

1924-25 年に、パリでダンディ、ヴィエルヌ、ヴィドールに学ぶ。

1926 年 6 月、帰国後最初のリサイタルでヴィドール《交響曲》第 5 番[抜粋]を取り上げる。

●南葵音楽文庫ミニレクチャー 日本オルガン界の泰斗 木岡英三郎(2019 年 11 月 8 日)